
蛇に嫁入り

九九ノ字 佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇に嫁入り

【Nコード】

N0591Z

【作者名】

九九ノ字 佳

【あらすじ】

いつも通りの毎日を過ごしていたはずの私はどこで間違ったのか蛇に嫁入りするみたいです。——人と妖怪の少し歪んだ恋愛話、第2です。

大嫌い

なんて嘘

大好きだから

「アヤトリ」

私は少し……いや、かなり天の邪鬼な性格だ。

大切な人に大嫌いって言うてしまうほどに
思ってることと言っていることが逆になることが多い。

そんな私でも私を受け入れてくれる大切な友達がいる。

少し天然な神社の跡取り娘の 天道 はなは と

少し怖がりな医者の娘の 涼風 さち の二人だ。

出会いは偶然だったけど今じゃあ、一緒にいることが当たり前になっている。

さちが行方不明になったと聞く前はこの友情に終わりがあるなんて信じてなかったんだ。

その日は、いつもより蛇をよく見かける日だった。

別に山の近くに住んでいるわけでもないけど

なぜか小さい頃から蛇をよく見ていたから珍しくも無かった。

だけど、その日は

心の中をかき回されるような不愉快な気持ちになったんだ。

まるで監視されているように感じたんだと思う。

蛇に監視されてるなんて、可笑しいこと言ってるけど。

もしかしたら自分も。

何て心配していたからそんな風に感じたのかもしれない。

そしてその心配は的中した。

色とりどりの

宝石も

価値がわからないなら

ただのごみ

「アヤトリ」

学校から家に帰っている途中、ふと視線を感じて私は立ち止まった。いつもは気にしないのになぜか今日に限って気になってしまったのだ。

人通りが少ない道だからか視線を感じる方を振り返ってみるとすぐに誰が見ていたのかわかった。

そこにはニヤニヤと笑う男の人がいた。

ぞわりと不快感が心のなかに溢れてくる。

その人はこの町の中で明らかに浮いている着物姿で首に赤い目のような水晶のついているチョーカーをつけている。

その男の人の緑のショートヘアは普通はあり得ない色で染めている

のかもしれないな、と心の中で思った。

全てにおいてどこか人と違う彼。

私が何より嫌だったのは蛇と同じ鋭い金の目で私を見ていたことだ。

「何か用ですか？」

駄目だとわかっていても問いかけてしまう。

男の人は気味悪く笑ったまま

「あんた、無防備だって言われない？」

逆にそう聞き返してきた。

馬鹿にされた気分だった。

まるで今、自分がここに居るのは間違ってるって言われた気がした。

こんなことならさっさと帰ればよかったと思いながらその男を睨むと

「俺みたいな怪しい奴に声かけられたら普通、走って逃げねえ？」

大きく一歩こちらに足を踏み出して男は言った。

ビクッと体が強張ったが強がって

「べ、別にあんたくらいならすぐ逃げれるもん」

そう言ってしまった。

可愛がって

可愛がって

いたぶり

遊ぶ

「アヤトリ」

「べ、別にあんたくらいならすぐ逃げれるもん」

そう言ってからすぐに後悔した。

男と女の力の差や体格の差から私が逃げられるわけなんて無い。

今、走って逃げたならまだ助かるかもしれないけど

足がうまく動きそうになかった。

何で素直になれないんだ。と心の中で自分を叱りながらも私は相手を睨むのをやめなかった。

男は距離をゆっくりつめてくる。

私が強がっていることなんて男にはわかりきった事らしく

私との距離を二、三步でつめられるほど近くなったとき

男は少し呆れたように

それでも笑顔のまま言った。

「あんたって馬鹿だよ。こんなときは誰かに助けを求めなきゃ、すぐに食べられちゃうよ?」

そんな風に言われてから私はふと思った。

さっきから男の言葉が私を心配しているようにしか聞こえないのは気のせいだろうか、と。

そう思って考え込んでいたせいか、私は男に何も言わなかった。男は何も答えない私を不思議がったが、そこにはふれずに続けて言う。

「この頃、蛇をよく見かけるだろ? あれはあんたを見るためだったけど気づいてなかったろ」

まるで、男がその蛇に命令していたかのような言葉に私は眉をひそめる。

男は気にせず、笑っていた。

「馬鹿らしい。あなたの話には付き合いきれません」

出来る限り冷たく聞こえるように私は男に言ったが

男は私がそう言うのをわかっていたかのように

すぐに言葉を返してきた。

「駄目だ。あんたは俺の花嫁になるんだから俺の忠告は聞け」

子供に言い聞かせるような声音でそう言った彼を

私は信じられない思いで見た。

誰が、誰の花嫁だって？

聞き間違いかと思ったが男は言い直すこともせず笑ったまま。

私は本当に厄介な人に関わったらしい。これは詐欺か何かだろうな。
とそう決めつけて

私は心の中でため息をついていた。

その出会いが私の平凡だった毎日を変えるなんて
誰が想像できるだろうか。

可愛い子よ

その身に

鎖を巻き付けてしまいたい

「アヤトリ」

私は心の中でため息をついたけど

男は私が全く信じていないことに気づいたらしく

私の目の前でため息をついた。

「知らない奴にこんなこと言われたら普通は信じないだろうけど。
……ああ、もう説明すんのもだるい」

ぐしゃぐしゃと自分の髪を掻き毟るようにしながら

男は本当にめんどくさそうに言った。

まるで、私が悪いみたいな言い方に少しカチンときたけど

私が何かを言う前に男が私に近づき私の手を握った。

男が力を込めているせいかわ握られているところが痛い。

「黙ってついてこい。おとなしくしてれば危害は加えない」

ポツリと低く呟いた男の声に私ははじめて恐怖を覚えた。

さっきまでの優しい雰囲気はもうなかった。

大丈夫

安心して

君を殺すことはないから

「アヤトリ」

男に引っ張られて呆然と歩き続けていると

男はある森の方に歩いているんだとわかった。

その森は通称、日落の森と呼ばれるところで

綺麗な紅葉が有名なところ。

だけど、古くから妖怪や幽霊がでる場所としても有名なところだった。

あの森に入ってもいいことなんて一つもないよ。

と、よくお婆ちゃんに言われていたのを思いだした。

私はこれでもお婆ちゃん子だ。一回も好きとか、ありがとうとか言えなかったけどね。

お婆ちゃんが言うことは絶対という私の中のルールから、あの森に行かない。この男から逃げるが一致する。

この手を振り払って逃げなくちゃと必死に手をはずそうとしたが力が強くて振り払うことができなかった。

だんたん怖くなってくる。

どうして男はあの森に入ろうとしているのかが、わからない。

全くわからないよ。

頭の中でぐるぐるといろんな憶測が現れては消えてを繰り返している。

だけど、声に出すことはできなかった。

結局、私は何も言えないまま

男と一緒に山に入ってしまったのだった。

出会ったのは

こんな場所で

会うには

ふさわしくない友

「アヤトリ」

山の中は薄暗く、どこか別の世界に足を踏み込んでしまったかのよう
うに思えた。

木々が風のせいで揺れ動き、生きているようにも見える。

そんな森の中を男に手を引かれて歩き続けていると

とても大きな木がある場所の前で急に男が止まった。

そして、警戒を含んだような声で木に向かって言ったのだ。

「……何のようだ、白梅」

と。どういふことかわからず首をかしげていると

「ふふ……やっぱり、ばれてましたか？」

と、木の方から返事が返ってきてやっとなの後ろに人がいるのに気づいた。

ぐっと男の手を握っていた力が少しだけ強くなった。

いったい、この二人の関係はなんなのだろう。と、一人、心の中で思うのだった。

「邪魔しに来たのか？俺から花嫁を奪う気か？」

怒りを含んだ低く声音に私の方が恐怖を覚える。

だけど、白梅と呼ばれた人は平気そうな声で答えを返してくる。

「ええ、邪魔しに来ましたよ。僕はあなたが、どんな花嫁を迎え入れても構わないと思っていたんですが、さちの友達である橘ゆうこが来るとは思わなかったもので」

今、さちって言った？

「どういふこと？」

つい、眩いてしまった。

さちがここにいるなんて全く、思っ
てなかったからだ。

そんな、私の眩きを見
無視して木の後ろに
いる人は言う。

「橘ゆうこ、今すぐここから立ち去りなさい。あなたはまだ、こちらには来ていない」

それが、どう意味なのか私にはわからないでいた。

蛇と鬼が喧嘩をすれば

すかさず

狐がやって来て

彼らの仲を取り持つ

「アヤトリ」

「橘ゆうこ、今すぐここから立ち去りなさい。あなたはまだ、こちらには来ていない」

それが、どう意味なのか私にはわからないでいた。

突然言われたからではなく本当に意味がわからない。

だけど、男には意味がわかっているらしく

逃げるなよ、とでも言いそうな目で私を見ている。

そもそも、私の手は男に握られているから逃げようにも逃げれるわ

けない。

私が何も答えないせいか

嫌な静寂がその場を支配し始めた。

その時、りんつと聞きなれた鈴の音が聞こえたかと思うと

「娘っこが困っているだろ。離してあげなよ」

隣にいる男でもなく、木の後ろにいる人でもない声が聞こえてきた。

声のした方に目を向ければそこに狐面をつけた黒髪の青年が立っていた。

「……琥珀」

男が呟く。

それはいろんな感情を混ぜ混んだような声音だった。

白梅さんは暫く、黙っていたが

「何しに来たんですか？琥珀」

男とは違うイライラしたような声音で突然現れた黒髪の青年に言った。

そういえば、先程から木の後ろにいる人だけは姿を見ていない。

木の後ろにいる人も彼らと同じ年くらいの青年なんだろうか。

そう思いながら答えを聞くために琥珀と呼ばれた彼を見た。

表情は狐面で隠されているせいでわからない。

だが、狐面の青年は諦めたような声音でこう答えた。

「お前の嫁御が逃げ出したらしい。それを言いに来たんだ」

と。その言葉にざわりと空気が変わった気がした。

はじめて足を踏み入れた

その場所にあったのは

見つかるわけがないと

思い込んでいたもの

「アヤトリ」

「お前の嫁御が逃げ出したらしい。それを言いに来たんだ」

その言葉にざわりと空気が変わった気がした。

私の気のせいではないはずだ。

「そうですか」

空気を変えた原因だろう白梅さんは淡々とそう呟く。

あまりにも、感情なく呟いたことに私が首をかしげそうになってい

ると

ゴツと重々しい音が響いた。

びくつと心臓が跳び跳ねた気がするほど驚いてしまう。

そんな姿を見せなくなかったから、すぐに冷静を装ったけど。

だけど、私がびくつとしたのに男は気づいたらしく

優しく微笑まれ

「大丈夫だ。安心しろ」

そう言われた。

そんな私達のことなんか気にせず白梅さんは

ちっと舌打ちをして

「こんなことになるんでしたら鎖をつけてこればよかったです。それとも、橘ゆうこがここに来るかもしれないと言ったのが間違いだっただけでしょう」

そう言いながら、もう一度、近くにある木を殴る。

ゴツと重々しい音がまた響いた。

びくびくしながら

白梅さんがいる方に目を向けた。

「……嘘」

信じられないような気持ちから声が漏れてしまう。

白梅さんが殴ったあの大きな木は半分以上が消えていたからだ。

「白梅、お前な」

男が呆れたように、だけど、どこか嬉しさを含んだような声音で白梅さんに言う。顔は装う気もないのか少し、笑っていた。

そんな男の声音に白梅さんはもう一度、舌打ちをした。

琥珀さんは、そんな二人の様子を見て

ため息をついてから叱ふように

「……蛇我羅」

と、男の名を呼んだ。

この時、私はやっと男の名を知ったのだった。

愛されることと

愛すことは違う

愛そうと思うことと

愛されようと思うことは同じ

「アヤトリ」

「……蛇我羅」

男の名を呼んだ琥珀さんの声を聞きながら

私は男の名を知らなかったつけ。

と、思ってしまった。

すでに、この蛇我羅と呼ばれた男を受け入れている自分がいる。

私は惚れやすいし、流されやすい。

まあ、素直になれなくて別れるのも早いけど。

だから、蛇我羅と呼ばれた男を受け入れないことなんてできないと思う。

人は皆、愛されたいと願うものだから。

「いつまでも、ここにいても意味ありませんね。逃がした責任があるものを殺さないといけませんし、さちを迎えに行かないといけません」

私が物思いにふけていると白梅さんがそう言って、森の奥に走っていった。

やっぱり、

姿は見えなかったけど

草木がかすれる音とかで遠ざかっていくのはわかった。

「琥珀はどうすんの？」

白梅さんがいなくなったことに興味がないのか

蛇我羅さんはすぐに琥珀さんに問いかける。

琥珀さんは少し間をあけてから

「どうせ、止めたって聞かないんでしょ？」

と、答えになっていない答えを返してきた。

蛇我羅さんはその答えに笑顔で頷くと

「娘っこ、逃げたくなったらいつでも言いなよ。助けてあげるから」

琥珀さんはそう言い残して白梅さんとは違う方向にいらなくなった。

「ようやくいなくなったかー」

蛇我羅さんは回りを見渡してから呟く。

その声はどこか嬉しさを含んでいた。

「……じゃ、蛇我羅さん？」

さっき聞いた名前で彼を呼ぶと

「風刺」

そう言葉を返された。

それが彼の名前だと気づくの少し時間がかかった。

「なっ、何で私があんたの名前を呼ばなきゃいけないのよ！」

別に呼んでもよかったのだけど、恥ずかしさが勝り、ついそう言ってしまった。

言ってからすぐに後悔する。

蛇我羅さんの目が怪しく光ったからだ。

ニヤリと何かを企んだように笑う蛇我羅。

もう心の中でもさんをつける気もない。

何で、私は素直になれないんだとこの時もやっぱり、そう思った。

泣いても

笑っても

君を手放すきはない

「アヤトリ」

にやにやしながら近づいてくる蛇我羅に少し、恐怖を覚えて逃げようと思える私。

だけど、たいして距離もなかったから逃げる前に私は彼に捕まってしまった。

「生意気なところは可愛いけど、あんまり素直にならなかったらお仕置きな」

楽しそうに楽しそうに言う彼をきくと睨み付けると

彼はそれすら楽しそうに笑った。

「震えてんのに生意気」

クスクスと笑ってからぐいっと手を蛇我羅に引っ張られて腕の中に閉じ込められる。

顎を指で上に持ち上げられキスをされるのにそう時間はかからなかった。

苦しくなるくらい深くキスをされる。

どンドンと蛇我羅の体を叩きながら離せと訴えても無視をされていた。

それでも諦めずに何回も叩いていると

ちゅっとリップ音をたてて蛇我羅はキスをするのを止めてくれた。

息を止めていたせいか、酸素が足りなくて、すぐに空気を吸おうと何度も呼吸を繰り返す私に

蛇我羅は「大丈夫？」と首をかしげて聞いた。

お前のせいだよ。と言いたくなった私は悪くない。

二回言うが、私は悪くない。

私の息が整うまで、蛇我羅は私を見ているだけだった。

蛇我羅が何もしようとしないまま一分が過ぎた頃。

なにかにたいし、イラつきを感じながら私は息を整えることを止めた。

少し前から息は整っていたけど安心のために長めにやっていただけだからだ。

ゆっくりと視線を蛇我羅にあわせようとすると、それを邪魔するかのよう

誰かが私の手を握った。

11

現れたのは大切な友

一緒にいたのは蛇

追いかけてきたのは鬼

「アヤトリ」

誰かが私の手を握ったせいでびくつと体が強ばる。

助けを求めるように握られてない手を蛇我羅に伸ばしかけた。

だけど、すぐに

「ゆうこ！」

と、聞き覚えのある声が私を呼んだから動きはピタッと止まる。

それは会いたくて仕方なかった友人の声。

すぐに私は後ろを振り返り、その姿を確かめた。

嘘じゃないと確認しないと信じられなかったからだ。

そこにいたのは、泣きそうになっているさちだった。

どうして泣きそうになっているのかはわからなくて少し、困惑してしまう。

「……さち？」

彼女の名前を呼んでみた。

……返事はない。

ただ、手を握る力が強くなっただけだった。

いつもと違うさちに不安になる。

怪我でもしたの？

どうして、何も言わないの？

なんで、ここにいるの？

何もされてないよね？

溢れてくる疑問。

だけど、口からでたのは

「何、泣きそうになってんのよ。うざいな」

心にもないことだった。

蛇我羅の笑った声だけよく聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0591z/>

蛇に嫁入り

2011年12月16日03時45分発行